

馬衡・唐蘭編 未刊本『甲骨刻辞』調査記録

(書写書道教室) 東 賢 司

Search Records of Unpublished “Jia Gu Ke Ci” edited by Ma Heng and Tang Lan

Kenji HIGASHI

(平成 21 年 6 月 5 日受理)

1. 馬衡と甲骨文字

金石学や篆刻を考究する者で、「馬衡」の名を知らぬものはあるまい。故宫博物院長としての肩書きが有名であるが、『中国金石学概要』『凡将齊金石叢稿』等を著し、主として石文の研究において名を残した研究者でもある。

この馬衡と古代文字の研究者として著名な唐蘭の署名のある『甲骨刻辞』と仮称された拓本集を2005年12月に入手した。この拓本集には約380枚の原拓（一部は印刷）が、台紙に無造作に貼られている。この甲骨拓本を日本に持ち帰り、初期的な分析を行ったところ、おそらく整理されてから数十年経過する現在でも、出版がなされていない未刊の資料であることがわかった。これらの資料を既刊の甲骨著録と比較するとともに、この甲骨周辺に見られる古代文字研究者のつながりを明らかにしてみたい。

さて、本章では馬衡について、その生涯を甲骨文字に関わる部分を中心に追跡したい。馬衡は清朝末期の1881年（光緒7年）6月20日に浙江省鄞県で生まれた。字は叔平、号は凡将齊主人。1899年（光緒25年）上海に出てから葉薇卿と結婚し、南京西路に居住していた。1920年に北京大学は金石学課程を新設したが、その史学系講師となった。1922年2月（40歳）には国学門に考古学研究室が設けられ、主任となった。馬衡が北京に上京したのはそれらよりも前の事であると推定されるが、金石学者としては、1920年（38歳）ころから名声を高めるようになったと考えてよい。考古学研究室で培われた人脈は、その後の研究者としての地位を確実なものとした。考古学研究室では、羅振玉・伯希和・王国維

が外部の通信導師となっている。1922年2月27日の「研究所国学門委員会第一回会議記事」には「沈兼士によって考古学研究室が既に設立されたことが報告され、本校が甲骨及び古代画磚を獲得した」という記事が残っている。羅振玉などの古代文字研究者を招聘することにより、北京大学での古代文字研究が一気に加速する。後述の『甲骨刻辞』には、羅振玉が編集した著作の番号が残されることが多いが、馬衡と羅振玉にはこの時点から接点があった。

1923年5月24日（41歳）には、古迹古物調査会が成立し、馬衡が会長となる。会員には容庚や董作賓がいて、ここでも人的なネットワークが築かれることになる。「研究所国学門紀事」中には、考古学会が収集した文物のリストが載せられているが、「甲骨類 五四七」とあり、さらには「所蔵甲骨文字…権拓、拟于下学年印行。」とあり、出版のために拓本が採られたことが確認できる。

また、調査会は各地の発掘調査に関わり、洛陽一体の発掘を指揮していた郭玉堂も河南采訪員となり、考古学会の収蔵古物は甲骨が655件となっている。

1923年（41歳）の時に、北京大学史学系教授となり、北大研究所国学門導師を兼任する。「国立北京大学研究所国学門報告」には、研究生中の文字学を専攻した中には、商承祚「殷墟甲骨文字」や容庚「金文編」等があり、その後、古代文字研究の基盤書となっている。国学研究院は4年間しか存在しなかったが、70余名の学生が卒業し、その後の国学界で活躍している。

馬衡は北京大学で一貫して金石学課程を担当し、1924年（42歳）には『中国金石学』を編印し、1927年（45歳）にはその改訂版である『中国金石学概要』を定稿し

ている。同年に作成された「国立北京大学研究所国学門組織表」「研究所の学問主要職員表」には、考古学会主席に馬衡の名がある。また、1923年（41歳）から1929年（47歳）までは北京大学図書館古物美術部の主任となり、1929年3月（47歳）には北京大学図書館主任となっている。この後、北京大学に数年勤務し、1933年11月（52歳）に教職を辞職している。

この時期の馬衡の周辺には、多くの研究者が集まっている。当時、清華大学国学研究院の導師であった王国維・陳寅恪・李濟らが集まり学術交流している。後に記録する唐蘭は王国維の弟子であった。

次に、故宮博物院との関係について記述しておきたい。故宮は清代には紫禁城と言われ、皇帝の居城であったが、1911年に辛亥革命が起こり1925年に故宮と呼ばれるようになる。その収蔵品は、思いつくだけでも、台湾、南京、天津、瀋陽に分散され、一部分は、日本や欧米の博物館等にも収蔵されている。

馬衡が故宮と関わりを持つようになったのは、1924年11月（43歳）のことである。当時の内閣が「協理清室前後委員会」を組織させ、皇室の公財・私財の一切を管理させた。しかし、既にその時には、天津に逃れた溥儀が多くの紫禁城文物を持ち出している。現在の天津市博物館に収蔵され展示されている名品の多くは、元は紫禁城内にあったものであり、保存状態がよく大きな甲骨片も見ることができる。

1925年9月29日（44歳）に委員会が開催され、故宮博物院臨時董事会と故宮博物院臨時理事会の組織が決められ、馬衡は後者の理事に名を連ねる。その年、10月10日に故宮博物院が成立している。1926年12月（45歳）に故宮博物院維持会が成立し、15人の常務委員の一人となる。その後は軍閥の動向に左右されるようになるが、1927年9月20日（46歳）に故宮管理委員会が成立、10月24日には24名の幹事が任命され、馬衡はその一人となる。後に古物館の副館長となっている。

その後、1928年10月5日（47歳）に故宮博物院組織法が制定され、三日後に故宮博物院理事会条例が公布、馬衡も理事の一名となる。1929年2月には易培基が故宮博物院の第一院長に任命され、同3月15日（47歳）には、馬衡は副館長を任命される。しばらくして戦火を逃れるために、故宮文物は南遷する。1933年7月には

故宮第一院長の易培基が故宮文物の違法な売買の疑いをかけられて辞職させられる。南京で開かれた理事会で、馬衡が代理院長に推薦され、9月21日（52歳）に代理院長兼古物館館長となる。11月4日には北京に戻り、北京大学教授を辞職し、故宮の仕事に傾注するようになる。1934年4月（52歳）には故宮博物院院長となった。院長に就任しては、戦火を逃れるための文物移動の連続であった。これは概ね1947年まで続くことになる。

戦後の1946年には南京で「勝利後第一屆文物展覽」が開催され、故宮の新蔵文物が若干展示されている。唐蘭が展覧会企画に加わるようになるのもこのころからである。その後、中華民国から中華人民共和国へと国名が変わるが、馬衡は故宮博物院院長であり続けた。

2. 馬衡と唐蘭との関係

次に『甲骨刻辞』のもう一人の編者である唐蘭についてみてゆきたい。誕生は1901年、没年は1979年。馬衡とは20歳違である。号は立庵、別名に唐佩蘭、唐景蘭がある。『殷墟文字記』『天壤閣甲骨文存』『中国文字学』などの著書があり、存命中は古代文字の第一人者として名を馳せていた。

唐蘭は、1923年に無錫国学専修館を卒業し、王国維の弟子となって、甲骨・金文などの古文字を研究するようになった。1929年頃には天津に居住するが、文学雑誌の編集に当たっていた。1930年に遼寧教育庁に勤務、1932年に北京大学国文系講師となり、北京大学での活動が開始される。

ここで王国維との関係を述べておきたい。馬衡と王国維との関係は非常に良く、唐蘭の北京大学への道は、馬衡によって築かれたと考えてよからう。王国維は、1924年に北京大学考古学会が発表した「保存大宮山古述宣言」に激怒し、北京大学研究所国学門導師の職務を辞任して大学との関係を断ってしまう。しかし、馬衡との個人的な交流は継続していたようで、1925年秋には、馬衡から送られた漢魏石経残石拓本に感激し、書信を送っている。また、1926年7月26日午前、燕京大学で「中国歴代之尺度」と題して講演をしているが、馬衡は暴风雨の中を聴講している。1927年6月2日には昆明湖に入水自殺をしているので、北京大学との関係を断った後でも、二人には最晩年まで交流があった。

唐蘭は王国維の晩年をつぶさに見、馬衡との関係も徐々に深まっていった。唐蘭からすれば、師匠亡き後の新たな師であったろうし、馬衡も唐蘭の才能を評価していた。また、北京大学での関係だけではなく、故宮での接点も見られる。1935年5月には特約専門委員となり、翌年には正式に専門委員となる。1939年西南聯合大学副教授に任ぜられ、1940年には西南関大教授及び文科研究所導師となる。

1946年には北京大学に再び戻り、中文系主任代理となる。前述のように、この年には「勝利後第一屆文物展覽」の企画に参画しているので、北京大学への復帰も馬衡の口添えがあったと思われる。1952年に故宮博物院の研究員に任ぜられ、後に副院長になる。1954年には中国科学院の歴史研究所の学術委員となる。1978年には中国古文字学術研究会理事となる。

さて、馬衡は1948年(民国37年)から1951年(中共3年)まで、毎日毛筆で日記を付けている。日記は、私的な要素が強いものであり、馬衡の感情を深く読み取ることができる貴重な文献である。その「馬衡日記」には、唐蘭のことが33日に渡って記録されている。その多くは唐蘭という本名による記述ではなく、「立庵」という号による記述であることが興味深い。文物を鑑賞したり、博物館の運営について議論したり、種々の記録があるが、1949年(民国38年)9月19日(月)には、以下の記録がある(括弧内は東の補足)。

森玉が自宅を訪問し(次のような話をした)。唐立庵と謝剛主に東安市場で会い、立庵が北大を離れ古物館長に就任することを諫めたが、立庵は既に同意してしまっていた(ということである)。彼(立庵)は上海から戻ってきておらず、余が口を挟むことはないであろう。

手稿原本には、書き直しの後があり、一種の心の乱れが読み取れる。王国維亡き後の師としての馬衡にとって寝耳に水の話ではある。ましてや自分が院長である故宮のことである。一言相談があってもいいだろうという無念さや、今となってはどうしようもないというあきらめの感情を読み取ることができる。

3. 未刊本『甲骨刻辞』

馬衡と唐蘭が編集し、出版しようとしていた『甲骨刻

辞』はどのような資料であったのか。馬衡が甲骨文字を収集できるようになったのは、北京大学に勤務してからの時期である。編集は、北京大学に考古学研究室が設けられた1922年以降、馬衡が北京大学を辞職するまでの1932年までの10年ほどの可能性が高い。後世、1922年までは甲骨文研究は初期の段階にあると指摘される。「龍骨」と言われる漢方薬に文字が刻まれている事を発見してから、大規模に発掘が行われ、著録・考釈等が出版されている時期である。これをリードしてきたのは羅振玉である。

1922年までに甲骨文に関しての主たる出版物を年代順位に並べると、以下のものがある。

- 1903年 劉鉄雲『鉄雲藏龜』
- 1904年 孫詒讓『契文舉例』
- 1910年 羅振玉『殷商貞卜文字考』
- 1911年 羅振玉『殷墟書契』
- 1914年 羅振玉『殷墟書契善華』『殷墟書契考釈』
- 1915年 羅振玉『鉄雲藏龜之余』
- 1916年 羅振玉『殷墟書契後編』『殷墟古器物図録』『殷墟書契待問編』
- 1917年 明義之『殷墟卜辞』
姫佛陀『戩寿堂所藏殷墟文字』
王国維『戩寿堂所藏殷墟文字考釈』
- 1921年 林泰輔(日)『亀甲獸骨文字』

馬衡と羅振玉のつながりは、前述のように1922年2月(40歳)には北京大学国学門に考古学研究室が設けられ、羅振玉が外部導師となってからである。実際に考古学会が甲骨を収集したことについては、具体的数量とともに指摘した。

また、この当時の北京大学の実情をよく知る人物として傅振倫がいる。彼は1906年生まれであるので、唐蘭よりも5歳年下である。傅は1929年北京大學史学系を卒業し、卒業後は助教となり、大学にとどまっている。当時の馬衡や唐蘭を直接知る人物である。この人物は「馬衡先生在学術上的主要貢獻」と表題のある一文を『浙江学刊』1993年3期に記し、また、『傅振倫文録類選』(学苑出版社、1994年)に「馬衡先生伝」を記している。一種の回顧録であるが、注目すべきはこの文書に『甲骨刻辞』に関する記述があることである。それらによると、『甲骨刻辞』は全六巻、北京大学所蔵資料であり、解放

前（中華民国時代）のことであるので、学校の経費が厳しく、文科研究所に封存され、今に至るまで出版されていないと記載している。

更に傅振倫をキーワードにして『甲骨刻辞』について調査してみると、北京大学考古学会の記事に当たった。「記北京大学考古学会」（『博物館学』1987年1期）には、「『甲骨刻辞』『封泥存真』『古明器図譜』『大同雲崗石刻』『興化寺壁画』の著書を整理したものの、印刷ができなかった。」と掲載している。このことから、北京大学考古学会が収集した甲骨片が『甲骨刻辞』として出版されようとしていたことがわかる。

では、考古学会が収集した資料は、どこからもたらされたのであろうか。前出の「馬衡先生在学術上の主要貢献」には、達古齋の主人である霍明志の記事がある。霍には『達古齋古證録』という著書があり、当時の収集家として名を馳せていた。霍が収集した甲骨を北京大学考古学会に献じようとしたが、偽物であることを見抜き拒絶した旨の記載がある。しかし、前出の『馬衡日記』1949年4月30日には、「霍明志という人物は既に71歳になるが、藏品を国家に寄贈した。霍は天主教徒（カトリック教徒）であるが、私は30年も前からのこの者を知っている。北京大学所蔵の殷墟甲骨四箱はその藏品である。」と記されている。傅振倫は霍の藏品を偽物であると記述しているが、実際には、真と判定できるものもあり、北京大学に収蔵されたようである。収蔵品のルートはこれだけではないであろうが、その一部が古物商によってもたらされたというのは貴重な情報であると言える。

4. 既刊本との比較

次に、私蔵の『甲骨刻辞』が、既刊の資料とどのくらい一致するか確認してみたい。この拓本集は、編集の初期段階のようであり、このまま印刷できる状態ではない。縦31センチ×横22センチの台紙に張り込まれ、脇（漢籍の魚尾に当たる部分）には「國立北京大学 研究院文史部」と印字されている。元々六巻であったが、三巻しかない。ただ、編集がその後やり直されている可能性も高いので、本資料が『甲骨刻辞』の一部分しかないとは一概には言えない。その第貳巻末には「甲骨刻辞卷中 鄞縣馬衡 秀水唐蘭 類次」と書かれており、この著書

は兩名により編纂されているものであることがわかる。三巻合わせた拓本の枚数は380片である。

『甲骨刻辞』は、甲骨著録の中でも初期的なものであるために、原骨は他の著録にも集録されている可能性がある。特に、北京大学考古学会の会員をみても、羅振玉や王国維をはじめ、古文字研究者が多く参加している。当時最も注目されていた古代の文字であるので、重複されていても不思議ではない。

そこで、過去の著録を多く集録している郭沫若『甲骨文合集』（中華書局、1977-1982）との比較を行い、一致するものを提示する。また、『合集』と一致したものについては、胡厚宣『甲骨文合集材料来源表上編一・二』により、原骨あるいは拓本の収蔵機関、『合集』に採用された拓本資料の出典等を調査し一覧にした。いつの時期に施されたのかは不名であるが、『甲骨刻辞』には、鉛筆により通し番号が振られている。番号の振り方には、番号が振られていない拓本があるなど、一部不備が見られるが、これを無視をして比較作業をすることは難しく、本論ではこの鉛筆書きの番号に従う事にした。元拓中に番号のないものは、例えば「87b」のように、87番の後に載せられているものとして記録した。拓本資料と既刊資料との比較は十分ではなく、調査は完全ではないが、現在確認できたもののみを掲載しておく（表1）。

表1から推定・推測できることは以下のとおりである。

- ①原骨の収蔵場所は、北京大学にあると思われる。
- ②作製時期について、『甲骨文合集』による分類では、I期とV期のものが多数を占める。
- ③拓本の所蔵者について、羅振玉・商承祚・社会科学院歴史研究所・南京師範学院の収蔵品が目立っている。北京大学で収集された甲骨片が、北京大学に関連のある古代文字学者によって先を争うように公にされていたことが想像できる。

5. 課題

残された時間での課題は、甲骨原骨の収蔵状況について更に調査を進める必要がある。当初、馬衡の収蔵品と思われた資料が、北京大学に収蔵されている可能性が高いことが分かったことは大きな収穫であったが、一方、北大のどこに収蔵されているのかは明らかにできていない。また、現時点で、未刊本『考古学』380枚の原拓中、

発行済みの著録に集録されていることが確認できたの 他機関に集録されている可能性もあり、更なる調査が
は241件であり、半数にも満たない。残りの甲骨拓本は、 必要である。

表1 『甲骨刻辞』と『甲骨文合集』『甲骨文合集材料来源表』の比較

【凡例】

1. 「正反」「期」「内容分類」については、『甲骨文合集』から採録した。
2. 「著拓号」「選定号」「重見状況」「原骨拓蔵」については、『甲骨文合集材料来源表』から採録した。「著拓号」は、過去に最も早く編纂された著録名と番号、「選定号」は、『合集』に使用された拓本の著録名と番号、「重見状況」は、別の著録に採用されているものの著録名と番号、「原骨拓蔵」は、原骨や拓本の収蔵者は収蔵機関名である。
3. 著録等の略号は以下のとおり。前…羅振玉『殷虛書契』1911年、簠…王襄『簠室殷契征文』1925年、続…羅振玉『殷虛書契続編』1933年、佚…商承祚『殷契佚存』1933年、通…郭沫若『卜辞通纂』1933年、鄭初下…黄濬『鄭中片羽初集（下）』1935年
4. 原骨拓蔵の略号は以下のとおり。北大…北京大学、歴拓…中国社会科学院歴史研究所蔵拓本、考墳…中国社会科学院考古研究所考墳室、簠拓…簠室甲骨拓本（王襄）、南師…南京師範学院、津博…天津歴史博物館（現在は天津市博物館）、山博…山東（省）博物館、文摺…甲骨文摺（曾毅公）

刻辞	合集	正反	期	内容分類	著拓号	選定号	重見状況	原骨拓蔵
12	24253	正	Ⅱ	方域	歴拓5737			北大
19	16641	正	I	吉凶夢幻	続4.47.3	歴拓5655		北大
20	16834	正	I	吉凶夢幻	続4.46.4	歴拓5662		北大
22	16895	正反	I	吉凶夢幻	続4.48.4	歴拓5946	考墳465	北大
24	31320	正	Ⅲ	吉凶夢幻	続4.48.10	歴拓5692		北大
25	19747	正	I	その他	歴拓5490			北大
27	17305	正反	I	吉凶夢幻	南師2.80,2.81	歴拓5801		北大
28	6060	正反	I	戦争	続4.31.1	続4.31.1（正）、歴拓5755（反）	佚60,61,南師2.84,2.85	北大
29	16942	正	I	吉凶夢幻	南師2.132	歴拓5584	考墳64	北大
31	39127	正	V	吉凶夢幻	歴拓5683		考墳482	北大
34	39318	正	V	吉凶夢幻	続6.5.1	歴拓5665		北大
39	39051	正	V	吉凶夢幻	続6.4.3	歴拓5650		北大
40	39058	正	V	吉凶夢幻	歴拓5669			北大
55	39110	正	V	吉凶夢幻	続6.2.8	歴拓5698		北大
57	39369	正	V	吉凶夢幻	続6.3.10	歴拓5682		北大
59	35703	正	V	奴隸主貴族	歴拓5565			北大
60	37867	正	V	天文曆法	前3.28.4	歴拓5653	通793	北大
61	37902	正	V	天文曆法	歴拓5478			北大
62	4917	正	I	奴隸主貴族	南師2.99	歴拓5738		北大
69	16584	正	I	吉凶夢幻	続4.48.5	歴拓5785		北大
70	5579	正反	I	奴隸主貴族	続4.5.5	歴拓5745	南師2.28,2.29	北大
72	3928	正	I	奴隸主貴族	南師2.174	歴拓5515		北大
76	38892	正	V	吉凶夢幻	歴拓5674			北大

刻辞	合集	正反	期	内容分類	著拓号	選定号	重見状況	原骨拓蔵
80	39173	正	V	吉凶夢幻	歴拓6081			北大
82	38885	正	V	吉凶夢幻	続6.3.3	歴拓5672		北大
84	38859	正	V	吉凶夢幻	歴拓5678			北大
87	36852	正	V	方域	簠地16	簠拓620+歴拓5483	続3.20.2	津博・北大
89	36849	正	V	方域	続3.19.6		佚177	未詳
90	36869	正	V	方域	続3.19.9			未詳
91	36881	正	V	方域	続3.19.8	歴拓5485		北大
95	12936	正	I	氣象	続4.15.3	歴拓5484		北大
96	11998	正	I	氣象	歴拓5773			北大
97	12097	正	I	氣象	続4.21.6	歴拓5805		北大
98	12035	正	I	氣象	歴拓5597			北大
99	12531	正	I	氣象	続4.17.9	歴拓5762		北大
100	10199	正	I	漁猎畜牧	続4.7.2	歴拓5699	南師2.16,2.15	北大
103	12293	正	I	氣象	続4.23.8	歴拓5823		北大
106	17680	正反	I	卜法	続4.33.6	歴拓5800	南師2.36,2.37, 考墳316	北大
108	12178	正	I	氣象	続4.23.6	歴拓5815		北大
109	24770	正	II	氣象	続4.17.8	歴拓5757		北大
111	12040	正	I	氣象	歴拓5772			北大
112	12873	正反	I	氣象	続4.24.5	歴拓5753	考墳298	北大
116	38139	正	V	氣象	歴拓5564			北大
117	38201	正	V	氣象	続4.14.8	歴拓5804		北大
120	1407	正	I	奴隸主貴族	歴拓6974			山博
121	24935	正	II	氣象	歴拓5604			北大
166	38482	正	V	祭祀	続2.4.7	歴拓5636		北大
167	38576	正	V	祭祀	続2.4.2	歴拓5616		北大
172	39474	正	V	その他				北大
173	38394	正	V	祭祀	続2.10.8	歴拓5610		北大
174	38389	正	V	祭祀	続2.10.9	歴拓5612		北大
182	35376	正	V	奴隸和平民	続2.5.5	歴拓5632	佚182	北大
183	35737	正	V	奴隸主貴族	続1.22.10	歴拓5607		北大
188	35915	正	V	奴隸主貴族	続1.26.4	歴拓5509		北大
190	35947	正	V	奴隸主貴族	続1.26.2	歴拓5844		北大
193	35934	正	V	奴隸主貴族	歴拓5654			北大
194	35850	正	V	奴隸主貴族	歴拓5510			北大
197	37038	正	V	漁猎畜牧	続2.16.5	歴拓5647		北大

刻辞	合集	正反	期	内容分類	著拓号	選定号	重見状況	原骨拓蔵
198	37037	正	V	漁猎畜牧	続2.25.3	歴拓5845		北大
201	37211	正	V	漁猎畜牧	続2.26.10	歴拓5644		北大
202	36322	正	V	奴隸主貴族	続1.43.4	歴拓5498		北大
203	37280	正	V	漁猎畜牧	歴拓5640			北大
208	35367	正	V	奴隸和平民	佚192	歴拓5526		北大
209	37205	正	V	漁猎畜牧	続2.17.2	歴拓5643		北大
210	14313	正反	I	鬼神崇拜	続2.18.8	歴拓5522	南師2.5,2.6	北大
211	10939	正	I	漁猎畜牧	続3.40.1	歴拓5719		北大
212	358	正	I	奴隸和平民	続1.2.1	歴拓5534		北大
213	7919	正反	I	方域	続1.52.3	歴拓5752	南師2.63,2.64	北大
214	12495	正反	I	氣象	続1.27.9	歴拓5530	南師2.42,2.44	北大
215	22434	正	I	その他	続2.26.11	歴拓5634		北大
217	8973	正	I	貢納	続2.18.2	歴拓5558		北大
219	11200	正	I	漁猎畜牧	続2.25.8	歴拓5568		北大
220	4709	正	I	奴隸主貴族	続2.19.5	歴拓5830		北大
221	4641	正	I	奴隸主貴族	続4.34.2	歴拓5784		北大
223	25155	正	II	祭祀	続2.3.10	歴拓5712		北大
226	6035	正	I	軍隊刑罰監獄	続2.23.9	歴拓5531	佚180	北大
227	15692	正	I	祭祀	続2.7.3	歴拓5554		北大
228	23256	正	II	奴隸主貴族	続1.32.4	歴拓5520	佚172	北大
229	14548	正	I	鬼神崇拜	続1.36.4	歴拓5546	佚145	北大
231	10130	正反	I	農業	続1.41.6	歴拓5541	佚153	北大
233	15264	正	I	祭祀	歴拓5601			北大
235	10117	正	I	農業	続1.45.4	歴拓5529	佚46, 考墳59	北大
236	10102	正	I	農業	続1.50.4	歴拓5547		北大
238	2941	正	I	奴隸主貴族	歴拓5646			北大
239	2963	正	I	奴隸主貴族	歴拓5543		考墳467	北大
240	331	正	I	奴隸和平民	続1.39.3	歴拓5503	佚181	北大
242	6120	正反	I	戦争	南師2.52	歴拓5540		北大
244	805	正	I	奴隸和平民	続1.36.3	歴拓5598		北大
246	24885	正	II	氣象	続4.15.8	歴拓5759		北大
249	17997	正反	I	文字	歴拓5491			北大
250	3467	正反	I	奴隸主貴族	続1.47.1	歴拓5841	佚159,南師 2.19,2.20	北大
251	324	正	I	奴隸和平民	続1.12.8		佚154	未詳
254	17358	正	I	吉凶夢幻	南師2.55	歴拓5548		北大
256	15092	正	I	祭祀	歴拓5585			北大

刻辞	合集	正反	期	内容分類	著拓号	選定号	重見状況	原骨拓蔵
262	22861	正	Ⅱ	奴隸主貴族	続1.12.4	歴拓5545		北大
264	4261	正	I	奴隸主貴族		歴拓5808		北大
266	15664	正	I	祭祀	続2.16.4	歴拓5639		北大
269	22543	正	Ⅱ	奴隸和平民	続2.19.3	歴拓5517	佚413, 鄴初下 30.2	北大
271	23441	正	Ⅱ	奴隸主貴族	続1.43.2	歴拓5817		北大
272	15468	正	I	祭祀	歴拓5822			北大
273	8738	正	I	方域	南師2.56	歴拓5836		北大
274	1672	正反	I	奴隸主貴族	続1.46.4	歴拓5524	佚10	北大
277	38301	正	V	祭祀	南師2.237	歴拓5499		北大
278	1628	正反	I	奴隸主貴族	南師2.3,2.4	歴拓5767		北大
279	1774	正反	I	奴隸主貴族	続1.17.6	歴拓5518	南師2.90,2.91	北大
280	17548	正	I	吉凶夢幻	歴拓2.23	歴拓5838		北大
281	17568	正	I	卜法	続5.11.5	歴拓5839	佚160	北大
282	17600	正	I	卜法	南師2.30	歴拓5736		北大
283	4307	正反	I	奴隸主貴族	南師 2.82,2.83	歴拓5579		北大
284	4104	正	I	奴隸主貴族	南師2.154	歴拓5794		北大
285	13	正	I	奴隸和平民	続3.47.1	歴拓5500		北大
287	3994	正	I	奴隸主貴族	南師2.1000	歴拓5568		北大
288	19116	正	I	その他	南師2.43	歴拓5555		北大
290	19558	正	I	その他	佚163	歴拓5820		北大
293	6459	正	I	戦争	続4.30.1	歴拓5834	佚527	北大
294	4577	正反	I	奴隸主貴族	南師2.74	歴拓5583		北大
296	2642	正反	I	奴隸主貴族	続3.39.2	歴拓5723		北大
298	9532	正	I	農業	続4.27.6		歴拓5592	北大
300	13869	正	I	疾病	前7.2.2			未詳
308	3380	正	I	奴隸主貴族	南師2.148	歴拓5833		北大
309	5465	正	I	奴隸主貴族	南師2.149	歴拓5785		北大
312	6168	正	I	戦争	続1.10.3	歴拓5538		北大
319	6612	正	I	戦争	歴拓5818			北大
320	6761	正	I	戦争	続5.25.9	歴拓5706		北大
321	6562	正	I	戦争	南師2.98	歴拓5819		北大
322	7705	正	I	戦争	南師2.96	歴拓5843		北大
324	37857	正	V	天文曆法	続6.7.6	歴拓5525		北大
325	16261	正反	I	祭祀	歴拓5589			北大
327	492	正	I	奴隸和平民	南師2.95	歴拓5764		北大
187b	17870	正反	I	文字	南師2.159	歴拓5750		未詳

刻辞	合集	正反	期	内容分類	著拓号	選定号	重見状況	原骨拓蔵
291b	4274	正	I	奴隸主貴族	佚142	歴拓5539	南師2.97	北大
291c	37420	正	V	漁猎畜牧	歴拓5603			北大
291d	36385	正	V	奴隸主貴族	歴拓5560			北大
313c	9601	正	I	農業	歴拓5573			北大
313e	54	正	I	奴隸和平民	南師2.103	歴拓5512	文措935	北大
313g	36449	正	V	軍隊刑罰監獄	南師2.251	歴拓5562		北大
33a	35679	正	V	奴隸主貴族	歴拓5812		考墳338	北大
33c	38538	正	V	祭祀	続2.4.6	歴拓5618		北大
87b	36865	正	V	方域	簠拓628			津博
92a	38619	正	V	祭祀	続2.4.5	歴拓5614		北大
92c	38617	正	V	祭祀	続2.4.8	歴拓5626		北大

※この研究は、基盤研究 (B) 海外学術調査「故宫博物院に収蔵される甲骨文の来源調査—未刊本『甲骨刻辞』の解読を通して—」(課題番号: 19401028) の成果の一部である。

